

特集 宴会ってそもそも何だろう？

無礼講 で佐賀を明るく!!

秋も深まり温かい食事とお酒が恋しい季節になってきた。会社や親戚、友人との呑み会の機会が増えてくる。集中するときには週に数件お呼ばれすることも。中には1カ月に50件以上出席したという猛者もいる。一瞬、顔を出すだけで一日に数件回らないとこなせない。ここまで行くと一緒に食事をすることが目的ではなくてくる。そもそも宴会って何だろうか？

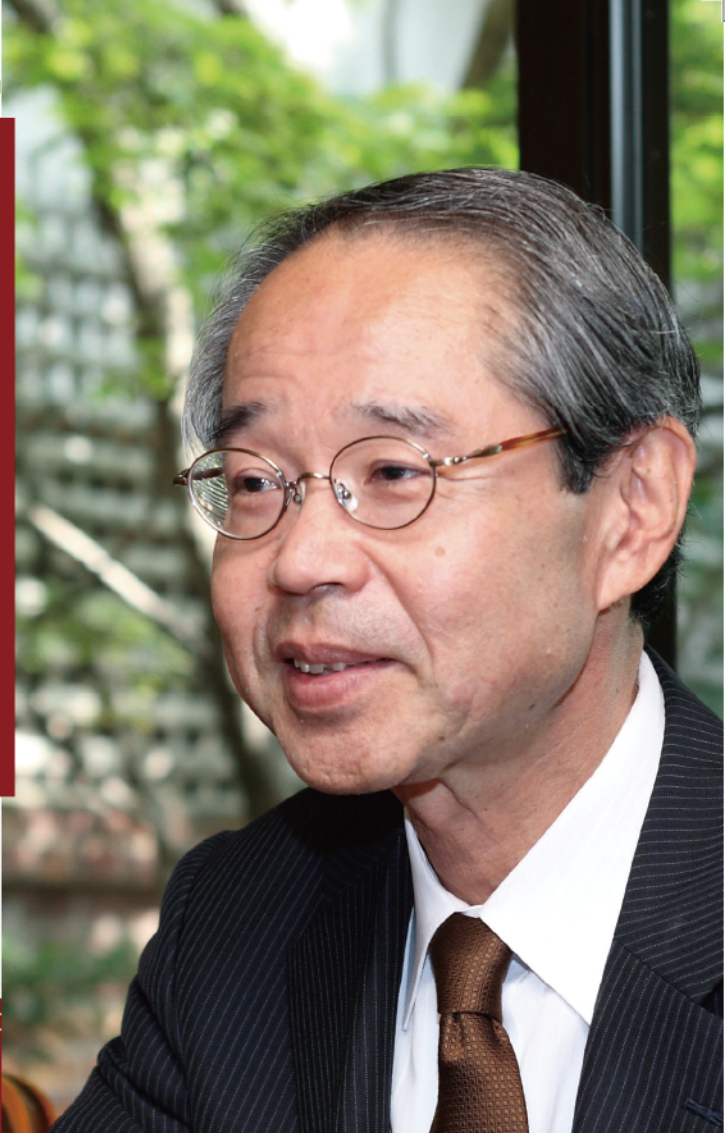
メンバーと親しい仲間同士もあれば、会社や地域の人たちと一緒にいることもある。時代前は旅館や料亭でのドンチャン騒ぎというイメージだったが、最近では仲間同士で気軽にお酒や料理を味わいながら、おしゃべりを楽しむ場合も多いと聞く。

今や幻となりつつある「宴会芸」とはどのようなものか。佐賀ユーマア協会事務局長で旅館「あけぼの」社長の音成日佐男さんに宴会全般のことを聞いた。起源から役割、そしてどういった芸があったのか。さらには「宴会芸必要論」まで。何だか息苦しい今の社会に足りないのは昔ながらの宴会なのだ。

さらに古今東西の「宴会」に関する話を集めてコラムにまとめた。1万2000年前から現代の宴会事情まで。呑み会での小咄にもってこいの読み物だ。

「なぜ仕事が終わっても、会社の人間と付き合い合わなくてはいけないのか」。そういうクールな考えもカッコイイ。でも、日常から離れ、ぐでんぐでんに酔っぱらいながら馬鹿な素人芸に興じる。そんな利根的な行動も、社会からの距離という意味ではある種の孤高といえるのではないか。祭りには見るより参加する方が楽しい。無礼講で、いろんな人の新たな一面を発見して、佐賀をもっと明るくしよう!!





佐賀ユーモア協会事務局長／旅館「あけぼの」社長

音成日佐男さんに聞く

忘新年会のシーズンが迫ってきている。そもそも宴会って何だろう？ 佐賀ユーモア協会事務局長で旅館「あけぼの」社長の音成日佐男さんに聞いた。

神事の後は無礼講

「宴会と言えば日本酒ですが、酒は五穀豊稷の象徴。一年の実りを感じ感謝する神事の後には、神さまへの捧げもののお裾わけをみんなまで戴く『直会』という会が宴会の起源だと思えます」と音成さんは語る。神事は厳かに、その後は無礼講。まずは年下が、年上の人にお酌をするなど基本的なルールがあるが、お酒がまわると上下の関係なく共に楽しむ。

外国では酔っぱらうことは自己コントロールができていないと判断されるが日本はちょっと違う。「日本人は普段はなかなか音を言わない。でも、酒の力を借りて思っていることを素直に話す。少々、行きすぎても、こういう席のことだから、と大目に見る文化があります」。特別な日を意味する「ハレ」と、日常である「ケ」。宴会は「ハレ」であって、日常では許されないことも、見逃される。むしろ、酒を飲むのはベロンベロンに酔っぱらって、自分をさらけ出すためののだ。ガス抜きの機能として生活に定着していた。

距離を縮める効能

宴会は神事や冠婚葬祭など共同体内部で行うものだったが、時代が下るにしたがって、商売上の付き合いなど、初めて会う人同士の距離を縮める役割が出てくる。ビジネスでの関係は腹の探り合いという部分もあり、お酒の力を持ってしてもなかなか打ち解けない。「そこで芸者さんや翫間（わかん）という、間を取り持つ仕事がありました」。芸者さんは踊りなどで宴席を華やかにする。遊びのひとつ「野球拳」は芸者さんとお客さんがじゃんけんをして、負けた方が身に付けているものを一つずつ外していく。芸者さんはきちんとした和装。お客さんはほとんどが浴衣姿。着ている数が違うので、芸者さんが負けることはほとんどないという。

翫間は男性の仕事。笑い話などで場を盛り上げる。「お客さん同士をつなぐエージェンシーのような役割も果たしていたようです」。



やってみました シバオケ

音成さんから聞いた芝居のカラオケ「シバオケ」。気になったのでモテモテさが編集部で挑戦することに。衣装は4人分。「金色夜叉」の貫一、お宮に、「国定忠次」の渡世人2人分だ。無理矢理引っ張り出され、あからさまにヤル気のないスタッフ。だが、衣装を身につけた瞬間にすごいテンションに。勝手に小芝居を始める始末。コスプレ人気の秘密が分かった気がする。

テープから流れる台詞と音楽に合わせて、それっぽく動く。だんだんとその気になっていく。全員がすごい集中力で役をこなしていく。こんな姿、仕事ではみたことない。馬鹿なことだからこそ、普段以上の力が発揮されるのか。

1本分の芝居を終えると、なかなかの充実感。しっかり汗もかく。こりゃ酒が旨いだろうな。今年の冬は「シバオケ」が来るに違いない!!



宴会芸はカンフル剤

芸者さんと翫間がプロの仕事だとしたら、「宴会部長」はアマチュア芸の達人といったところか。仕事場では静かで目立たないのに、宴会になると率先して楽しむ。どんな企業にも一人は必ずいたが、最近はめっきり聞かなくなかった。

「端唄や小唄などプロ顔負けの芸を披露する方もいらっしやいましたが、大半は下ネタ

です。日本や韓国など日常的に道徳心が重んじられる国は、宴席では逆に艶っぽい笑いが人気を集めるようです。宴会が一気に無礼講に突入するきっかけになる役割があったようです。「馬鹿をやるスイッチ」として先陣を切る存在だったという訳だ。すりこぎの棒を帯で結び、股間に立てる。腰の動きだけで寝かせたり立てたり。「見立て」は座布団で折ったり重ねたりして、いろんなものの形を作ったり。掲載できるのは



1万2000年前の宴会

新年会、花見の宴、暑気払い、忘年会…。「日本全国酒飲み音頭」という歌があるが、四季の祭りさえ酒宴の口実かと思えるほど、人々は宴会が好きだ。人類にとって宴会とは？

昨年、イスラエルから最古の宴会跡発見のニュースが伝えられた。せいたくな野牛や亀の肉をお腹いっぱい満喫したらしい。1万2000年前の洞穴遺跡には、人骨が埋葬された二つの穴があった。シャーマンらしい初老の女性の墓とみられる穴からは、リクガメの甲羅などが少なくとも71匹見つかった。もう一方の穴からは、家畜の牛の祖先と考えられる野牛の3頭分以上の骨があった。亀の甲羅には焼かれた跡があり、肉は全部で17キロ以上。洞穴からは28人以上の人骨が見つかったが、肉の量は35人以上に相当する。野牛は狩猟対象として最大の動物であり、危険

な狩りによらなければ得られなかったはず。古代の人々にとっては一番のごちそうだったとみられる。人がまばらなうちは自由気ままに暮らせても、地域の人口密度が高まってくると、人と人、集団と集団の関係が大きな問題になってくる。人間関係の緊張を和らげるために、宴会は古代人の知恵の結晶ではなかったのか。そんな学者の分析が添えられていた。宴会を通じた地域社会の発展をへて、人間関係がより濃密な農耕社会に移行していったと考えられるという。人間を「社会的動物」と定義したのは古代ギリシャのアリストテレスだが、宴会とは人間の本質である社会性に深くかかわる要素なのかもしれない。

この辺が限度。「マジックやものまねは繰り返しすると新鮮味がなくなりますが、この手の芸は毎年、同じ出し物をして必ずツケます。宴会にはかかせないものでした」。

元祖コスプレ「シバオケ」

「25〜30年前には芝居のカラオケ『シバオケ』が流行っていました。金色夜叉や国定忠治など芝居のセリフが入ったカセットを使って、素人さんが名場面を再現する。衣装やカッターも用意してあって、宴会芸として人気でした」。コスプレの元祖といった感じか。芸達者な人はアドリブで暴露話をするなどアレンジも出来る。カラオケもド派手な着物で歌っていたようで、羽目を外して盛り上

げることが重要だったようだ。「上手に歌う必要もないですし、お芝居を練習することもない。素人がやるということに面白みがあります。会場との一体感は素人芸ならではのですね。現代ではカラオケは上手に歌を披露するものというイメージがある。仲間うちやカップル、合コンならばそうだろう。たくさんの方が楽しむ宴会では、時に下手な方が良いのだ。野田首相誕生で流行りそうな

「どじょうすくい」も、上手い下手関係なく笑える出し物だ。

閉塞社会 宴会が必要

個人主義の風潮の中で、昔ながらの宴会の数は減っている。「かつてはお酒を頻繁に呑みなかつたから宴会はそれだけで『ハレ』の場でした。現代のように呑む機会が増えてくると宴席の有難さが薄れていくと感じます。『ハレ』の場が日常化する、お酒の場でも羽目を外せなくなりそうです。かつて宴会は共同体の安全弁として機能していた。普段は言えないことを直言したり、仕事では中々見えない能力を発揮する場がなくなっていく。今の閉塞した社会の要因がここにあるような気がしてならない。「共同体意識が薄れている今こそ、何でもアリで馬鹿ができる宴会が必要ではないでしょうか」。



姿消した社会の潤滑油



室町時代の「年忘れ」

わが国の文献に現れる忘年会らしきものは、室町時代にさかのぼるそう。600年近く昔のこと。

公家たちによる優雅な連歌会のだが、伏見宮貞成親王がしたためた『看聞日記』の12月21日の下りには「歌を楽しんだ後で酒盛り乱舞し、まるで年忘れのようだ」とある。この時代には民衆の行事として「年忘れ」

われていたらしい。

これと別に「歳暮礼」と呼ばれた皇室行事があり、武士の世界でも厳粛に執り行われた。さらに「御用納め」など年末行事も重なる。後の忘年会を生み出す下地ができたと思われる。江戸時代になると、豊かな商人たちの間で年末行事が盛んになり、金力を誇示する一族の大饗宴を開く豪商も現れた。元禄時代の井原西鶴の読み物にも

と呼ばれる宴会が既にあつたようだ。ただ「年忘れ」の語意が今日の忘年会を直接指すわけではない。本来の意味は、自分の老いを忘れるほど面白い、あるいは年齢差も忘れ交友することを表すときに「年忘れ」が使

「みそかには、年忘れとて、暇な年寄り呼び集め…」などとも見える。別の読み物には、御用達の商人が役人を接待するシーンも現れる。芸者や太鼓持ちを伴って、夜通しの船上パーティーを繰り広げたという。接待宴会の原型がすでにあつた。

出し物、1番人気は演説

「忘」

年会「そのままの言葉が文献に登場するのは、夏目漱石の『吾輩は猫である』が最初だという。今日につながる近代忘年会は、明治に始まるという。国際日本文化研究センターの園田英弘教授の著書に詳しく載っている。

身分制が崩壊し新しい人間関係が拡大する文明開化の気風の中で、西洋のパーティーを模した様々な「会」が流行する。国会、学会、送別会がそれだ。時代をリードした佐賀県人たちのエピソードも伝えられる。「華族の忘年会」を国内初の西洋料理店で主催した鍋島直大公、最初の園遊会を早稲田の自宅で開いた大隈重信など、首都で大きな話題になったという。忘年会の新潮流に乗ったのは、なんとといっても官僚たち。大臣を囲んで料理屋で…。仕事の延長上になることが多く、費

用はたいがい公費から。官僚の接待文化の芽ばえともいえそう。年々派手になって、黒田清隆首相は忘年会自粛令を出すほどだった。

軍楽隊の演奏、手品師やブコの芸人を招くなど、出し物は大がかり。そのなかで一番人気の余興は、演説だったという。評判の言論人のパフォーマンスは忘年会で喝采を浴びた。今日では想像しにくい時代の気風が感じられる。

官僚の忘年会は、やがて官僚予備軍の学生にも広がっていく。忘年会ブームを支えたのは、多量なりとも余裕のできた中間階層。官僚や都会のサラリーマンの間に、ボーナスの時期に合わせる憂さ晴らしに羽目を外す忘年会が定着していった。無礼講や無茶苦茶主義の宴会スタイルが出来たのもこの時代だ。ハイカラな忘年会ブームに



対して冷やかな視線もあった。小説家の坪内逍遙は「忘年会」と題した新聞小説の中で「西洋風の交際大事の風潮の中で、伝統的な年中行事は古臭いと捨て去られ、年忘れの酒宴ばかりが盛んになっていく」と嘆いている。

「忠臣蔵」成功の陰に忘年会

元

禄15年12月14日、殿中での刃傷事件の責任を取って詰め腹を切らされた浅野内匠頭の家来たち47人は、

かねて警戒していた吉良邸のこと、警護のところが、義士はひとりの死者もなく、吉良側は、主の首級を取られた上に、16人が討ち死に、21人が負傷した。覚悟の違いはあつたとしても、なぜこれほど明暗を分けたのだろう。

吉良邸では、師走の恒例に従って、前日の13日には煤払いが行われた。そして当日、年忘れの茶会があつたばかり。お茶と言いながら「おちやけ」を楽しむのが通例で、警護の



侍たちも酔いつぶれていたのではない。この千載一遇のチャンスで、義士のひとり杉野次房は「夜泣きそば屋」に身をよつて探っていた。常連客だった槍の名人、俵屋玄蕃とのエピソードは忠臣蔵の泣かせどころのひとつ。また、討ち入りのため47人が集結したのも、そば屋。今日のそばに通じる「そば切り」が広まった時期のことだ。年越しそばの習慣そのものが義士の故事を起源とするともいう。

忠臣蔵には、煤払い、年越しそば、忘年会と、歳末のキーワードがいくつも隠れている。恒例のテレビドラマで師走気分をかきたてられるのも、むべなるかなである。

高度成長を追い風に最高潮

企

業社会と忘年会は切っても切れない関係にある。宴席ならでは、普段と違った立場で意見を交わすことができるため、仕事中はわかり合えなかった部分でも相互理解が深まり、人間関係が良好になることも多い。ひいては業務の効率向上につながる。酒のせいで逆にますぐることもあるだろうが。

庶民にまでその野を広げた忘年会文化がクライマックスを迎えるのは、戦後の高度成長時代だろう。主役は企業だ。景気の追い風に乘って、社員旅行や社内運動会、花見会と会社主催の行事が年々盛んになった。

そのなかで、忘年会は一年を締めくくる重要な社内行事。宴会と言えば、お座敷、芸者

がつきもので、温泉旅館に繰り出してのドンチャン騒ぎがひんしゆくを買いもした。色っぽなお座敷シヨウや風船割り、ミルクのみ競争など宴会芸メニューは豊富だった。マンガ「釣りバカ日誌」の主人公ハマチャ



んの十八番は「ホテルイカ踊り」だが、そんなセクハラギリギリの宴会芸を競い、クライマックスになると裸踊り、野球拳が飛び出すのが定番。座布団回しなど珍芸至芸に、仕事では目立たない宴会スターがもてはやされたものだ。



新人類そして雇用不安へ

昭

和の大衆忘年会を支えた要因の一つは、終身雇用制だった。戦後は慢性的な労働力不足が続いたため、経営者は人材確保にあの手この手を駆使。その結果、企業は共同体のような色彩を強めた。社内行事の会費も、福利厚生費を使ったり、労働組合や親睦会が積み立てたり…。当然、社員全員参加を前提にしているわけで、



今日では考えられない会社ぐるみのお祭りだった。

やがて高度成長が一段落する80年代になると、社内の雰囲気も変わってくる。

1984年に男女雇用機会均等法が成立し、職場に女性の姿が多くなる。宴会でスカートの女性がお座敷に座るのは具合がよくない。男中心の乱痴気騒ぎやお色気シヨウにも、

女性陣から苦情が出る。そんなわけで、徐々にお座敷離れが始まった。温泉旅館より、ホテルの宴会場でスマートに…。86年の流行語大賞は「新人類」。プライベートな「アフター5」を大切にする若者たちは企業忘年会につれなくなった。会社の上司より友人、家族との個人的なパーティーを大切に

にする。そんな忘年会では、もちろん仕事の話なんかタブーだ。

バブル経済が崩壊すると、リストラの風が吹き荒れる。終身雇用が危うくなり、職場にクールな成果主義が漂うようになると、企業忘年会はすっかり勢いがなくなってしまう。一方でプライベート忘年会は活発で、多様化、個性化が進んでいるようだ。

漢字文化圏で共有する忘年会

米

国では「Bounenkai」と書くそう。忘年会に当てるはまるものがない。欧米の歳末にも、クリスマスパーティーはある。宗教行事だから忘年会とは質が違うというべきか、似たようなものに見えるべきか。一方、漢字文化圏には共通項が多いようだ。

江戸時代に、長崎で日本人の通訳が中国人から「忘年の行事は日本にもありますか」と尋ねられた話が残っている。かの地にも似た習慣が早くからあったのは確かだろう。今日では「年夜飯」と呼ばれる大みそかの行事があり、家族だけでなく企業の行事にもなっているという。日本の忘年会に近いといえる。

「忘年会」の呼び名をそのまま共有しているのが、お隣の韓国。旧日本帝国支配下での文化輸出の名残だという。先祖や血縁、地縁を大切にする韓国では、職場だけでなく同窓地域、郷里など様々なグループの忘年会があり、11月のうちから始めないと間に合わないほど。

同じく日本による統治を受けたが、台湾には独自の忘年会がある。「尾牙」は土着の間信仰が土台になった歳末行事。ごちそうを神様に供え、祭りが終わったら家族でいただく。やはり企業の行事としても盛んで、伝統に基づくだけに日本の忘年会以上に華やかに行われるという。社員は全員参加で、数千人規模という例も珍しくないそうだ。

